
幸福を告げる声

くる ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸福を告げる声

【Nコード】

N1967W

【作者名】

くる ひなた

【あらすじ】

大国ヴァルキュリアに隠れるように寄り添う小国リュセツトには、それはそれは愛らしいお姫様がいた。「ルル」と呼ばれて親しまれる公女に訪れる、出会いと真実と小さな恋の物語。

リュセット公国

澄み渡った空はどこまでも高く、茂る草木の青い香りは静かな平穏に色を添える。

歩けば、足が踏み締めるのは柔らかな草と、豊穣な恵みをもたらす大地である。

そこに住まう人々は自然の与える恵みに感謝し、田畑を耕し牛を追う。

寒さに凍えず食うに困らぬ日常に幸せを噛み締め、けして争わず慎ましく、笑顔を絶やさぬ彼らの国の名を、リュセットという。

大国に隠れるように存在する小さな小さなその国には、それはそれは愛らしいお姫様がいた。

「こんにちは、いいお天気ね」

芝草を食む牛達を見守りながら、木陰でキセルをふかせて休憩していた爺達に、鈴の転がるような愛らしい声が掛けられた。

「おお、これはルル様、こんにちは」

「ほんに、気持ちのいい日でございますなあ」

透き通るようなブロンドの髪をおさげにして、艶やかな長い睫毛の下から覗く瞳は、澄んだ泉のように透明感のある水の色。

町娘のように質素なエプロンドレスを身に纏っているが、彼女こそがこのリュセット公国の公女、ルーズ・シータ・リュセットである。

先日十四歳になったばかりの公女には、既に伴侶を迎えた年の離れた兄と、民に慕われる君主である父がいる。

母を病で早くに亡くした彼女を父と兄はたいそう慈しんで育て、

明るく快活に成長した姫は、国民の間でも「ルル姫」と愛称で呼ばれるほど、とても愛されている。

城に続く街道を歩いて来たルイーズの足下はポコポコと音を立て、均された土の道を踏み締めた。

いや、踏み締めたのは彼女の足ではない。彼女が跨がっている暢気な顔をしたロバ、ロシナンの蹄だった。

ルイーズは愛ロバの太い首筋をよしよしと撫で、ふと何かに呼ばれたように空を振り仰いだ。

そして、しばらくじつとどこかを眺めていたかと思うと、黙って見守っていた牛飼いの爺さん達に向き直って言った。

「夕刻までに、一雨くるかもしれないわ。今日は早めに放牧を切り上げて、家に戻ってね」

「おお、それは気をつけなくては。お産を控えた牛がいるのです。雨に濡らしては大変だ」

「そうじゃ、そうじゃ。ルル様にお会い出来て助かったわい」

彼らはルイーズの言葉に腰を上げ、あと半刻ほどしたら牛を厩舎に戻そうと頷き合った。

ルイーズは幼い頃から時々、こうしてささやかな天気の変り変わりを敏感に感じ取り、ぼつりと告げることがあった。

それがまた毎回必ず当たるので、人々は予言というほど騒ぎ立てたりはしないものの、日常生活の上でおいに参考になっている。

「ルル様は、城へお帰りかの？」

「うん、この先の湖に寄ってからね。睡蓮の花がそろそろ咲きそうなの」

「そうでございますか。しかし、ルル様も雨に合わない内にお帰り下さいよ」

「この季節の雨は冷とうございますぞ。風邪をひかれては大変じゃ」
「うん、わかった。ありがとう」

口々に早く帰れと諭す爺達ににこりと微笑んで、ルイーズはロシナンを促して森に向かって歩き始めた。

森を抜けたすぐ向こうが王城だが、途中に大きな美しい湖があって、確かに毎年この時期は睡蓮が見事な花を付けるのだ。空にはまだ、雨雲の気配は微塵もなかった。

牛飼いの爺達はキセルをふかしつつ、ポクポクと遠ざかって行くロバの上の小さな背中を見送り、ほうつと溜め息を吐いた。

「ルル様……ちいと、いつもの元気がなかったように思わんか？」

「だなあ。やつぱり、あの噂は本当なののお……」

ひと月前、王城に続くこの街道を、隣接する大国ヴァルクュリアの使者が通った。

噂では、リュセットの公女であるルーズと、かの国の王太子の婚姻が囁かれている。

そして明日、再びこの街道をヴァルクュリアからの客人が通ると、城から民達に通告があった。

別段、街道に並んで花道を作れだの、跪いてお出迎えしろだのという要請があったわけではない。

せいぜい「馬糞や牛糞は、できるだけ真ん中には落とさないでね」程度のお願いだっただ、明日お通りになる客人が、どうやら隣国のやんごとなき身分の方であることは、人々にも予想ができた。

「ルル様、ヴァルクュリアに持つていかれてしまうのかのお」

「あんな大きな国のお城で、苛められたりはしないかのお」

「心配じゃのお、心配じゃのお」と、白くなり始めた眉を八の字にして溜め息を吐き合う爺達の後ろを、その時大きな黒い馬が一頭通り過ぎた。

小さなリュセットでは国民のほとんどが顔見知りで、見たこともない人物が街道を通ればよそ者とすぐに分かるのだが、この時牛飼いの爺さん達は親愛なる姫君の行く末を憂うのに忙しくて、全く気付きはしなかった。

ルル

「ロシナンテ、ここで休んでて」

湖に到着すると、ルイーズは口バの背中からひらりと飛び降り、むしゃむしゃと若草を食み始めた彼を残して岸に近付いた。

澄んだ湖はまるでよく磨かれた鏡のように、周囲の景色をそのまま逆さに映し出し、あたりはしんと静まり返っていた。

いや、耳をこらせば、風がささやかに木の葉を揺らす音や、小さな虫がキリキリと鳴く音が聞こえる。

ルイーズの予想通り、睡蓮が見事に花開き、湖の中央に集まって鮮やかで上品な姿を見せていた。

「……ふう」

ルイーズは岸边に腰を下ろし、靴を脱いで水の中に素足を浸した。冷たさがじんわりと肌に染み入り、微かな身震いが身体を這い上がって来るが、構うことなくそのままだった。

そうして、深い深い溜め息を一つ吐くと、ルイーズは後ろに手を付けて上体を支え、首を仰け反らせて空を見上げた。

牛飼いの爺さん達の噂通り、ルイーズにはこの度、隣国ヴァルキユリアから婚姻の申し出があった。

ひと月前の使者が持って来た書状には、彼女を是非王太子ノエル・エディーラ・ヴァルキユリアの第三夫人に迎えたいと書かれていた。そう、第三夫人だ。

既に齡三十を迎える隣国の王太子には二人の妻がいて、しかもそれぞれに男子をもっている。

つまり、ルイーズが彼に嫁ぎ子を成したとしても、その子が次代の王太子になれる確立は非常に低い。

更に、リュセツトとヴァルキュリアの国力の差は、比べるまでもなく歴然としている。

ヴァルキュリアが気まぐれを起こしただけで、リュセツトはかの国に容易く飲み込まれてしまうであろう。

この度の婚姻の要請は、大国が矮小国に求める揺るぎなき隷属の確認であり、ルイーズは所詮人質に過ぎないように見えた。

しかし、どれだけ理不尽と思えども、その要求をはね除けるだけの力は、残念ながらリュセツトにはないのだ。

それを証拠に、父であるリュセツト公アドバーク三世は、ルイーズにヴァルキュリアの申し出を受けるか否か、問うことさえしなかった。

それはもはや、個人の意志など関わることのできない、両国間の政治的な取引であるのだ。

そして、明日。

王城にやってくるのは、婚姻を申し込んだ王太子本人なのだという。

当のルイーズはというと、この度の婚姻にさほどの感慨も抱いてはいなかった。

美形と名高い、夫となる王太子の容姿にも興味はない。

一国の君主の家に生まれた以上、意に添わぬ婚姻など覚悟の上であり、自分の身一つで愛する家族や国民が平和を得られるならば安いものだと思っている。

ただ、兄である皇太子夫婦の仲睦まじさをいつも身近で見てきたので、彼らのような愛情溢れる家庭を持ちたいと思っていたルイーズは、結婚相手が既に二つも家庭を持っていたことには、さすがにがっかりした。

はじまりは、政略結婚でも何でもいい。

それでもせつかく夫婦になるのだから、いずれは相手を愛したいと思うし、愛されたいとも思う。

けれど、三番目に嫁いだ自分がそれを望むことは、先の二人の妃達に対して厚かましいような気もするし、もしもルイズの愛情に王太子が応え過ぎれば、それはそれで不穏な状況になりそうな気がする。

もうこれは大国様へのご奉公と諦め、夢は捨てるしかないかな……と思いつつも、やはり溜め息の一つくらい吐かずにはいられなかった。

その時、さわりと風が吹いて、ルイズのおさげを揺らし頬を撫で、湖の上に波紋をこしらえながら、その中央に集まった睡蓮の花びらを揺らした。

途端、まあるく大きく花びらを開いたそれは、くるくるくるくる回りだし、まるで水面をダンスしているように見えた。

それはかくも美しく、憂いも忘れてもつと間近で見たいと願ったルイズは、白いフリルのエプロンだけを脱いで、スカートを腿まで捲し上げ、ザブザブと湖の中に入って行った。

居城は、すぐ近くである。

湖に入ったことを知れば、父や兄はともかくとして、母のような義姉と乳母はたいそう怒るだろうが、いつものことだ。

どうせ城に帰ったら着替えさせられるのだし、ちよつとくらいスカートの裾が濡れたとしても構わないだろう。

背後で草を食んでいたロシナンテが、ぶひつと鼻を鳴らしたのに振り返り、ルイズは「平気よ、ちよつとくらい」と片手を振った。しかしながら、湖は中央に近付くほどだんだんと深くなる。

スカートを捲し上げるのも、そろそろ限界がきた。

もう既に、太ももまで水に浸かっているし、下着が濡れるのも時間の問題だろう。

睡蓮の花まではまだまだ遠く、いったいに手を伸ばしても届きそうにない。

もういつそ、頭から水に飛び込んでやろうかしらと、ルイズが大胆なことを考え始めた時、背後でヒヒンと馬の嘶く声が聞こえた。

続いて

「――何をしているっ！！」

突如鋭い声が響いたかと思うと、ザブザブと乱暴に水を掻き分けて近付いて来る音が聞こえた。

一体何事かと立ち止まって、きょとんと振り返ったルイーズの二の腕を、力強い手がぐつと掴む。

そして、彼女が瞳をぱちくりしている間に、もう片方の腕がぐりりと腰に回されて、ザバリと水しぶきと共に抱き上げられた。

ルイーズはわけも分からぬまま、ぐらりと傾いだ我が身を支える為に、咄嗟に目の前にあつた亜麻色の頭にしがみつく。

それに対して相手は何も言わず、ただ逞しい片腕でルイーズを抱き上げたまま、また水をザブザブいわせながら岸边の方へと戻って行った。

そして、丁寧な仕草で彼女を地面に下ろすと、ふっと小さく溜め息を吐いた。

「……」

柔らかな草の上に座ったまま、ルイーズは湖から上がったきた相手を見上げた。

短く切りそろえた亜麻色の髪に、若葉のような明るい緑色の瞳をした男だった。

青年というにはまだどこか幼さが感じられる容貌に、年の頃はルイーズより少しばかり上だろうかと考える。

騎士服に包まれたその身は一見細身だが、先ほど水に濡れたルイーズを軽々と片手で抱き上げたことを思うと、その下には鍛えられた筋肉が隠されているのだろう。

彼はびしょ濡れのブーツを構うこともなく、ルイーズの前に片膝をついて頭を垂れた。

「リュセツト公国のルイーズ公女殿下とお見受けします」

落ち着いた低い声で問いかけられ、ルイーズはまだ呆然としながらも、彼の言葉に頷きを返す。

「お許しなく御身に触れた無礼、如何なる罰もいただきます。ですが、どうか早まらないで下さい」

「……早まる？」

「突然の婚姻に戸惑われるお気持ちも、他国に嫁がれる不安もお察ししますが、大事なお命を粗末にしてはなりません」

「……え？」

真剣な面持ちで語られる言葉に、ルイーズはきょとんと首を傾げた。

そうして、どうやら相手は、彼女が湖で入水自殺を図ったと勘違いしていることに気付いたのだった。

しかし、彼が勘違いをしてしまったのも無理はない。

リュセットの妖精のように愛らしいと評判の公女様が、睡蓮の花を側で見たいがためだけに、足を濡らして湖に入り込むほど好奇心旺盛とは知らないだろうし、実は泳ぎが大の得意で、衣服を身に着けたままでも難なく泳げるとも知りはないだろう。

明らかな政略結婚を悲観した小さな姫が、思いあまって湖にその身を捧げようとしていると、その光景を目の当たりにした彼はそれはそれは焦ったに違いない。

ルイーズは慌てて首を横に振り、「そんなことしないわっ！」と否定する。

騎士服の少年は戸惑ったように瞳を瞬き、それから「申し訳ございません」と小さく言って頭を下げた。

目の前に突き出された旋毛を見つめつつ、自分のお転婆がこの生真面目そうな騎士を慌てさせたのかと思うと、ルイーズは段々と愉快な気持ちになってきた。

ルイーズ自身はスカートの裾をぎりぎりまで捲り上げていたので、衣服は僅かにしか濡れてはいなかったが、慌てて湖に飛び込んだ少年の方は、ズボンもマントもずぶ濡れで、ブーツの中は浸水してひどい有様だろう。

ルイーズはくすりと笑うと、頭を垂れたままの相手の肩をぽんぽ

んと叩き、「いいの。私のほうこそ、驚かせてしまつてごめんなさい」と告げた。

「ところで、あなたはこの国の者ではないわね。ヴァルキュリアの方？」

ルイズが皺になったスカートの裾を払いつつ立ち上がると、少年はまだ跪いたまま「はい」と答えた。

「私は、ヴァルキュリア王太子殿下に仕える、アルク・シヴ・エリヴェールと申します」

「……王太子殿下がいらつしやるのは、明日ではなかったかしら？」

「はい。ですが私は一足先に、公女殿下への贈り物を献上する役目を仰せつかりました」

そつと視線を背後に向けると、ルイズの相棒ロシナンテの隣で、真つ黒い大きな馬が仲良く草を食べていた。

その背には上等な鞍と、確かに何か荷物も積まれている。

「そつ……、とにかく、私のせいで貴方をびしょ濡れにしてしまつて、申し訳なかったわ。早く城に行つて着替えなくちゃ」

「いいえ、殿下が気に病まれることは何も……」

「ううん、冷えて風邪を引いては大変。それに——」

ルイズは少年に立つように促し、それに従順に従つた彼の背の高さに驚きながら、見上げた視線をそのまま空へと高く上らせた。

「もうすぐ、雨が来るわ」

ルイズの言葉に、彼女に倣つて空を見上げた少年——アルクは、雨雲の気配もない様子に僅かに戸惑いを見せたが、ただ「はい」ただ頷き、相棒に向かって歩き出す小さな背中を静かに目で追つた。

アルク

城までは、すぐの距離だった。

黒毛の雄々しいアルクの愛馬の名は、クシカと言う。

彼は大人しく従順で、ぽくぽくと暢気に歩くルイズの口バに歩調を合わせ、二頭は並んでゆっくりと進んだ。

森が終わると、そのすぐ向こうに城門が見えた。

二人が近付いていくと、門の脇に腰をかけ暢気にキセルをふかしていた門番の爺は、「おお、ルル様、おかえりなさいませ」とにこやかに立ち上がった。

それから、ルイズの背後で馬から降り立った騎士に、「おや」と首を傾げる。

「そちら様は、見ない顔だねえ。水もしたたるいい男じゃの。いやあ、男を連れて帰って来なさるったあ、ルル様も大きゆうなられましたわい」

「ホルンったら、そんなわけないでしょ！　ヴァルクュリアの使いの方よ」

「ほう、そういえば。明日に先駆けてお一方いらつしゃると、ご通達があつたようになかったような……」

はて？　と首を傾げる門番ホルン爺に、ルイズは「まあ、しつかりしてよ」と溜め息を吐きつつ、後ろのアルクを振り返った。

「ごめんなさい。ちゃんとおもてなしするように、侍従長に言っわ」「いいえ、私のことはどうぞお構いなく」

そうこうしている内に、リュセツト公家の年老いた侍従長が、城内からぽっくりぽっくり暢気にやってきた。

彼はルイズに「おかえりなさいませ」と告げ、それから彼女の背後のアルクへと深々と頭を垂れる。

「ようこそお越し下さいました。うちの姫様とご一緒にそのお姿……事情は薄々お察し致します」

何やらルーズにとっては微妙に失礼な文句を並べると、「それって、どういう意味？」と頬を膨らませる彼女に対し、侍従長は「ええ、そのままの意味でございますよ」と微笑んでみせた。

「それより、ルル様。皇太子妃殿下が探しておいででしたよ。明日の為のドレス合わせの予定であったのにルル様がいらっしやらないと、たいそうご立腹の様子で」

「あー……そうね」

ルーズはうんざりというような溜め息を吐き、アルクに「じゃあね」とだけ声を掛けると、とぼとぼと城の方に向かって歩き始めた。

彼女の愛口バ・ロシナンテはというと、城の入り口で主人を見送り、その後は心得たように自らぼくぼくと庭の方へ歩いて行ってしまった。

「では、騎士様、どうぞこちらへ。ああ、馬はお預かりしますね」

「はい、よろしくお願いします」

ルーズと入れ替わってやってきた侍従らしき男が、「いやあ、いい馬ですな」と感心したようにその首を撫で、手綱を預かった。

アルクは愛馬クシカの背から積み荷を下ろし、持ちましようと言う年老いた侍従長の申し出を、「いえ、これは自分が」と丁重に断った。

その間に、クシカの手綱を持った侍従は厩舎へ導いて歩き始め、途中のんびり歩いていたロシナンテに追いつき、彼の手綱も一緒に持って、二頭共を庭の向こうへと連れて行った。

——その時だった。

今の今まで晴れ渡っていた空に急に雨雲がどよめき出し、ざあつと雨が降り始めたのだ。

天気之急転に、アルクは軽く目を見張った。

「やっぱり、ルル様の言う通りだったわね」

「すぐに洗濯物を取り込んで、よかったわ」

そんな彼を尻目に、すれ違う城の者たちは突然の雨に全く驚いた

様子もなかった。

ずぶ濡れのアルクの姿を気の毒がった侍従長は、すぐに彼を客室に案内した。

着替えと湯を勧められ、アルクは最初湯の方は丁重に断ろうとした。

しかし、自分の祖母ほどの年頃の女性に「リュセツトを訪ねて風邪を召されでもすれば、あなた様のお母様になんとも申し開きできませんわ」と、温かな微笑みで懇願されて、逆らうことができなかった。

彼女は、リュセツト公家の侍女を束ねる侍女頭だそうだ。

湯から上がって着替えると、居間には温かいお茶と軽食が用意されていて、侍女頭自らがアルクの為にポットからお茶を注いだ。

「替えのお召し物はぴったりのようで、ようございましたわ。ただ、ブーツは渴くまで少々かかりますわねえ」

「すみません」

「いいえ。公からお声が掛かるまで、どうぞお茶でも飲んでゆっくりなさいませ」

「……ありがとうございます」

実はアルクは、リュセツト公国の城であまりに温かくもてなされることに、少々面食らっていた。

何故なら、この度のルーズ公女への求婚については、ヴァルキユリア側であるアルクから見ても、いささか不躰感が過ぎると思っていたからだ。

小国とはいえ独立国であるリュセツトの、大切な大切な一人のお姫様を、あろうことか年の離れた王子の第三夫人にしようというのだ。

婚姻を結んだ順番といえども、しかし第一・第二夫人は自国の臣下の娘であるのに、一国の公女をそれより下位に据えようとは、まるで属国に対する扱いのように見える。

公家と国民の結束が固いリュセツトにとって、そんな失礼な要求をする隣国の使いは歓迎したくはないだろうし、当人であるルイズ公女もさぞ不満と不安を抱えているだろうと思っていた。

だからこそ、湖の中に入っていく彼女を見付けた時、まだ成人も迎えていない姫をそこまで思い詰めさせたのかと、ヴァルキュリアの人間としてひどく心が痛んだのだ。

けれど、慌てて岸に引き上げた彼女はきよんとするばかりで、アルクは自分が勝手な勘違いをして一人うるたえていたことに気付く。

公女には、望まぬ政略結婚を悲観したような影はなく、ただ全てを受け入れた穏やかさがあつた。

それは、おそらく立場上この度の事情を知らされているであろう、侍従長や侍女頭ら公家に最も近く仕える人々も同じ。

隣国からの正統な使者として、上辺だけなら丁寧な対応を受けるだろうとはアルクも予想はしていたが、これほど含みもない温かいもてなしを受けるとは思わなかった。

アルクがお茶を飲み干し落ち着いた頃、ようやくリュセツト公国の君主であるアドバーグ三世から声が掛かった。

謁見の用意ができるまでアルクが待たされたというよりは、彼が一息つくのを公家側が待つてくれていたのではなかるうか。

アドバーグ三世は、娘のブロンドよりはアルクの亜麻色に近い濃い金髪に、グレイの瞳をした優しそうな面持ちの紳士だった。

その脇には、ルイーズの兄でありリュセツトの次代となるクリス皇太子と、その妻ユミル皇太子妃が並んでいる。

クリスは父公によく似た面影の、実に穏やかそうな青年であり、ユミルは彼の幼馴染みであり従姉にあたる。

そして、リュセツト公を挟んで皇太子夫妻と反対側には、先ほどアルクと城門で別れた公女ルイーズが立っていた。

おさげにしていたブロンドは解かれ、癖のない真っ直ぐなそれが

光の束のようにキラキラと輝き、華奢な肩の上を流れている。

質素なエプロンドレスは、可憐で上品なワンピースドレスに代わり、妖精のように儚気な真正銘のお姫様へと変身を遂げていた。

とても、スカートの裾を捲し上げて湖にザブザブ入っていくような、大胆な少女と同一人物には見えない。

リュセツト公は片膝について頭を垂れたアルクに、とても優しい声で「楽しみにさい」と告げ、彼の名乗りを許した。

「お目にかかれて光栄です。アルク・シヴ・エリヴェールと申します」

「エリヴェールは、ヴァルクュリアで最も王族に近い公爵家だな。確か、宰相殿がエリヴェールの現在の当主であつたと思うが」

「はい、私はエリヴェール公爵家の末子です」

「そうか。君には何やら娘が迷惑をかけたようだね。すまなかつたな」

「いいえ……私の方こそ、愚かな勘違いで、公女殿下を煩わせてしまいました」

まだどこか幼さを残す騎士の実直な態度に、リュセツト公は好ましげに目を細めて頷いた。

そうして、アルクは先ほどのもてなしの礼を丁寧に述べてから、主である王太子からの贈り物を献上する。

受け取ったそれにさつと目を通したリュセツト公は、何やら一瞬苦笑めいたものを浮かべると、使者たるアルクの労をねぎらった。

——実を言うと、ヴァルクュリア王太子ノエルとリュセツト公女ルイズの婚姻は、正式にはまだ確定はしていなかった。

確かに、一月前のヴァルクュリアからの使者は、婚姻の要請を記した書状をもたらしたが、すぐに返事をせよとは言わなかったのだ。日を置いてノエル自らが伺う旨と、その際有益な話し合いの元に双方納得した上で、是非いい返事をいただきたいのことだった。

最終的には、リュセツトはかの国の要求をのむことになるだろう。しかし、何やら含みを持たせた書状の内容に、リュセツトの君主もその息子である皇太子も幾らか心当たりがあったのか、その時当人であるルイーズには婚姻の要請の事実だけ告げ、あとはずっと口を噤んでいたのだ。

リュセツト公アドバーク三世は、アルクにゆっくり寛ぐように声を掛けてから退室させた。

始終口を閉じて、父公の横でお人形のように大人しくしていたルイーズにも、部屋に戻るように命じた。

後に残った皇太子ノエルと皇太子妃ユミルは、深く溜め息を吐いて椅子にもたれ掛かった父公に、氣遣わしげに寄り添う。

「何があっても、何を知っても、ルイーズは私の可愛い娘だ」

「ええもちろん、父上。そして、私の自慢の妹です」

「リュセツト皆の、大事なお姫様ですわ」

息子は父の肩をそっと抱き、その妻は彼の手を優しく握った。

ロシナンテ

今回アルクが与えられた役目は、主である王太子ノエルからの贈り物を届けることだった。

しかし、それならばせつかく明日本人が来るのだから、その時に一緒に持ってくればいいではないかと思うのだが、一足先にそれを届けさせたい理由が、王太子にはあったのだろう。

その中身にアルクはさほど興味はなかったが、多忙な王太子自らが時間を割いて選別に加わっていたのは印象的だった。

それに、ここ数日何だかそわそわしている主を、アルクはずっと不思議に思っていたのだ。

この度の婚姻の申し込みは、政治的な色合いが強いのは否めないが、王太子自身はまんざらでもないのではなからうか。むしろ、ルーズ公女を迎えることをとても楽しみにしているのでは、とさえ感じられる。

何故なら、実は既に王太子の宮の一角に、彼女を迎えるための部屋が用意されているのだ。

他の夫人や子供たちは、別の宮に住まわせているというのに。贈り物の中身も知らないアルクがその理由を知るのは、翌日のことであった。

リュセツト公との謁見が済んで客室に戻るアルクを案内したのは、先ほど愛馬クシカを預けた侍従だった。

城に滞在中、彼がアルクに付いて世話を焼いてくれるらしい。ヴァルキュリアの公爵家であるアルクの屋敷にも、使用人は大勢いる。

彼自身大人にかしずかれることにも慣れているが、主人と使用人

との間に明らかな壁がある生家とは違う、礼儀をわきまえながらも体温の伝わるリュセツトのもてなしは、どこかこそばゆくて、しかし心地よかった。

せっかくなので厩舎への案内を頼んでみると、侍従は「もちろん」と快く引き受け、更にざつと城を見て回るのにも付き合ってくれた。「しかし、お連れの馬は実によく躡けられて賢い。黒毛も艶があつて美しいですね。アルク様がお育てに？」

「いえ……今年の始め、成人のおりに主から祝いと賜ったのです」「そうですか、お優しいご主人様ですね。では、アルク様は十六歳……ルル様とは二つ違いになりますな」

リュセツトでもヴァルキュリアでも、十六歳になれば大人と認められる。

侍従はアルクの父ほどの年齢で、聞けば最初に出迎えにやってきた侍従長の息子なのだという。

もちろん、公女ルリーズにも赤子の頃から仕えていた彼は、穏やかな顔に少し寂しげな表情を浮かべて続けた。

「アルク様は、これから王太子殿下の側にいらっしゃるのですか？」

「はい、生涯お仕えするつもりであります」

「そうですか、ではもしもルル様が王太子殿下に嫁ぐことになれば、アルク様ともご縁が続くのでしょうかね」

「……」

それはどうだろうか。

確かに、アルクは卓越した剣の腕と家柄のおかげで認められ、次期国王を約束されたノエルに仕えることを許されたが、彼が働くのはあくまで政務をする王太子の側である。

王太子妃となったルリーズに接するのは概ね侍女であり、特に男であるアルクとの接触など皆無に近くなるのではなからうか。しかし？？

「慣れない環境でルル様も寂しい思いをなさるかもしれません。年

の近いご友人ができれば、少しは心も晴れましょう。どうぞ、ルル様をよろしく願います」

続いた侍従の言葉に、アルクは否を述べることができなくなっていました。

厩舎に辿り着くと、クシカは丁寧にブラシをかけられ、飼葉と水をたっぷりと与えられて、たいそう機嫌がよかった。

アルクは厩舎の者に礼を言い、ふと気になって辺りを見渡すが、一緒に連れていかれたはずの公女の愛口バの姿がどこにも見えない。「ああ、ロシナントは庭ですよ。一応彼のための馬房もあるですけどね、だいたいルル様の部屋の近くで寝泊まりするんですよ」

「ロシナントはルル様が好きだからねえ」

アルクが彼について尋ねると、厩舎係と侍従は口々にそう言っ
て笑った。

アルクが城に到着してすぐ降り出した雨は、夕餉をいただき一息ついた頃にはすっかり止んでいた。

リュセットやヴァルキュリアのある大陸は、年中を通して比較的温かく過ごしやすい気候である。

それでも、日が沈めばそれなりに冷え、この日も外が暗くなるにつれて空気がひんやりとし始めた。

柔らかく吹き込む風の冷たさは、慣れない隣国の優しさに緩んだ我が身を引き締めるのにちょうどよく、アルクはベランダ側の窓を開け放ったまま、ベッドに腰掛け愛剣の手入れをしていた。

リュセットとヴァルキュリアの間では、創始まで遡っても争った歴史はなく、自他ともに認める友好国であるが、さすがに帯剣したまま入城が認められるとは、アルクも思っていなかった。

だから、城門でルーズを見送り案内に立った侍従長に対し、自

ら鞘ごと腰の剣を抜いて預けようとしたのであるが、彼には「はて？」と首を傾げられてしまった。

君主たるリュセツト公に直面するのだ。正式な使者とはいえ、他国の騎士が帯剣したまま謁見に臨むのは、警備上困るのではなからうか。

しかしそう問いかけたアルクに対し、侍従長は「ほう」と両眉を跳ね上げて、

「騎士様は、公に向かってそれを抜きなさるご予定がおりで？」などと、とんでもない問いを返してきたのだ。

「そんなこと、しません！」

「そうでしょうとも。では、大切なものはそのままお持ち下さい」そう朗らかに微笑まれて、アルクは大いに面食らう結果となった。それを大らかで余裕ある態度ととるのか、危機感がなく甘い考えととるのか。

どちらが正しいのか、人生経験の少ない彼にはまだ判断がつかなかった。

ひとときわ、風が大きくカーテンを揺らす。

その時ふと、アルクは窓際に何者かの気配を感じ取った。

いつもの癖で剣の柄に手を掛けてから、いけない、と思いとどまる。

彼はいくらか逡巡したものの、結局愛剣をベッドの上に残し、そつと窓辺に寄った。

「…………お前」

カーテンを開いてみれば、ベランダの前で鼻をふんふんさせていたのは、ルーズ公女の愛ロバだった。

ロシナントはアルクが出て来たのを見ると、ぶひつと小さく鼻を鳴らし、それからじつと彼を見つめた。

とばけた顔に眠そうな目。しかし、黒い大きな瞳の向こうには何か意味深なものを感じ、アルクは探るようにその視線に向き合った。

すると、ロバは再びぶひひつと鼻を鳴らして、踵を返した。

しかし黙ってその背を見送ろうとしたアルクを、彼は首を巡らして振り返り、またじつと見つめてくる。

アルクは付いてくるように言われている気がして、そつとベランダの欄干を乗り越え庭に降り立った。

それを見たロシナンは満足したように前を向き直し、ぽくぽくと歩き始める。

アルクが黙ってその後ろ姿に付いて行くと、しばらくして大きな噴水の前に出た。

豊かに水が流れるその袂には睡蓮の葉が揺れているが、まだ花は咲いていない。

そして、石造りの噴水の淵に腰掛け、じつと水の流れる様を見つめていたのは、ルーズだった。

隣に座って

ロシナンテはぼくぼくと噴水に近付いていくと、背中を向けたままのルイーズの髪を啄んだ。

振り返った彼女は相棒の姿にそっと顔を綻ばせ、それから静かに佇んでいたアルクを見付けて驚いたような顔をした。

「あら、こんばんは」

「こんばんは、殿下。このような時間に、お一人ですか？」

「いつものことよ？ こんな早い時間からお化けも出ないもの、怖くはないわ」

「……」

あなたはどうしたの？ と問われ、ロシナンテに誘われましたと答えれば、彼女はきょとんと不思議そうな顔をしたかと思うと、次の瞬間破顔した。

飾らない笑顔は年相応にあどけなく、薄闇の中でもアルクの目には眩しかった。

「私、少し貴方と話したいと思っていたから、ロシナンテが代わりにつれてきてくれたのね」

「私と？」

「うん、そう。アルクと」

ルイーズにおいでおいでと手招きされて、アルクは噴水の淵に腰掛ける彼女の一步手前まで近付き、その場に片膝をついた。

するとルイーズは訝しげに眉を寄せ、「違うよ、ここだよ、ここ」と自分の横をぺちぺちと叩いた。

「いえ、私は……」

一国の公女と並んで腰掛けるなど恐れ多いと、戸惑い遠慮するアルクだったが、次の瞬間白い華奢な両腕が伸びて来て、逆らえぬ彼

を半ば無理矢理噴水の淵に座らせた。

「座る場所があるんだから、座ればいいじゃない」

変なのつと笑われ、答えに窮するアルクを尻目に、案内役を終えたロシナンテは、噴水の下の水たまりに顔を突っ込み、ふがふがと喉を潤していた。

「アルクは十六なんですってね。成人したばかりなのに王太子殿下にお仕して、しかも単独で使いを任されるなんて、余程優秀なんだろうってお父様も感心していたわ」

「恐れ入ります」

「私より二つ年上なだけなのに、あなたはとても大人に見える」

「いいえ……私など、まだまだ……」

じつと、いつそ不躰なほど見つめてくるルイーズは、化粧つ氣がなくてもとても整った容貌をしていて、アルクは少し戸惑った。

ヴァルキュリアにおいて、王族に次ぐ家柄であるエリヴェール公爵家に生まれた彼は、美に秀でた者など掃いて捨てるほど見て来た。二人の姉たちもそれは美しく、王城に仕える侍女たちもまた美形揃い。

父や兄に時たま連れ出される夜会などで顔を合わせる、同じ年頃の令嬢たちもまた可憐である。

しかしながら、彼女たちの美しさは素直に認めながらも、アルクがそれに心動かされることなど今まで一度もなかった。

それなのに、ただただ真っ直ぐな賞賛と尊敬を浮かべたルイーズの瞳はキラキラとしていて、それに見つめられる自分が誇らしくさえ思えてくる。

嬉しさがこみ上げ、同時にとても照れくさくなり、アルクはそつと顔を伏せるようにして彼女から視線を逸らした。

けれど、少しだけトーンを落として続けられたルイーズの言葉に、彼ははっとさせられる。

「ねえ、アルク。……王太子殿下は、どんな方？」

そうだった。

どれだけ純朴にいとけなく見えても、彼女は一国の公女。家や一族の思惑で美しく培養される貴族の令嬢たち以上に、その小さな背に重きものを背負わされているのだ。

個人の意志など通用しない、国と国とを結ぶレールに乗せられる彼女の人生が、せめて少しでも幸せであってほしい——と、優しいリュセツトの人々と同じ願いを、その時アルクも抱いたのだった。

「ノエル様は、とても優しく立派な方です」

それは、主に対するお世辞でも何でもなく、アルクの本心から出た言葉であった。

王太子ノエル・エディーラ・ヴァルキュリアは、現国王と正妃の間に生まれ、幼い頃から次期国王を約束されて育った方であるが、地位や身分に驕ることなく努力家で、臣下の者にも細やかな気遣いを怠らない。

「そう……。アルクは、殿下のことが好き？」

「近くでお仕えできることが私の誇りです。誠実なお人柄で、民もみな殿下を慕っております」

王族と縁の深いエリヴェール家の末子として、彼にはアルクも小さな頃から随分と可愛がってもらった。

兄のように親しみ敬う王太子に、アルクは騎士として己の生涯を捧げると誓っている。

しかし、王太子の人となりをほとんど知らないルイズにとつては、アルクが語る彼の誠実さというものが、いまいち理解できなかったようだ。

ルイズは、年の離れた自分が求婚されたのが、王太子の好色のせいだとは思っていない。

彼だって、成人も迎えていないような小娘を妻に迎えるなど、政治的な理由がなければお断りだと思っているかもしれない。

けれど、断れない立場のルイズとしては、恨み言の一つでも言

つてしまいたくなるのは仕方ないだろう。

「お妃様もお子様も、もういらっしゃる。それなのに、今更婚姻なんて……」

「……申し訳ありません。その件に関しては、私が意見を申し上げるのは憚られます」

アルクに向かって言ったわけではないが、ぽつりと唇から零れ出たルイーズの言葉に、隣に浅く腰掛けていた彼は困ったように頭を下げた。

なんとも腰の低い騎士である。しかし、けして弱々しいわけではない。

昼間彼に湖から抱き上げられたルイーズは、その腕の逞しさを知っているし、公国への贈り物を一人で任されるほど王太子の信頼もあつたことを思うと、騎士としての腕も相当なのだろう。

彼の旋毛を眺めるのはもう二度目だな、と思いながら、ルイーズは実直で穏やかなアルクにはとても好感が持てた。

「アルク、ごめんなさい。あなたを困らせたかったわけではないの」
ルイーズがそう謝って、悪戯に目の前の旋毛をちよんと指先で突つくと、彼は若草色の瞳をまんまるにして、弾かれたように顔を上げた。

その様子がやっと年相応の少年に見えて、何だか楽しくなったルイーズの顔に、明るい笑みがふわりと戻ってくる。

すると、こちらも恥じらいが戻ってきたらしいアルクは、僅かに目を泳がせて顔を伏せた。

ルイーズとアルクが腰掛けた噴水の水たまりにも、睡蓮が植えられていた。

ロシナンテはまだそこに鼻先を突っ込んでいる。

彼は、口元に漂って来た睡蓮の葉をもしゃりとかじりかけたが、どうにもその味がお気に召さなかったらしく、上唇を裏返して不機嫌そうに歯をむき、ペツとそれを吐き出した。

それから、びしょ濡れになった顔をぶるんぶるんと振って水しぶきを飛ばし、その被害を受けたルイーズに「こらっ」と叱られた。「こちらの睡蓮は、まだ咲かないのですね」

湖の睡蓮とは違う種類なのか、こちらはまだ蕾の気配さえない。アルクにそう言われて水面を眺めたルイーズは、少し寂しげな笑みを浮かべた。

「そうね。でも、湖で見れたから、もういいの」

ルイーズは、もういつでも祖国を出る準備ができていた。

明日の王太子の訪問は、実質自分の迎えだと思っている。

父や兄にもそれ相応の覚悟はしておきなさいと、既にひと月前より言い聞かされていた。

毎年この時期になると、水辺のあちこちで咲く睡蓮の花を楽しみにしていたが、もう見ることもないかもしれない。

それはやはり寂しいことだが、隣の少年騎士が気遣わしげにしているのに気付कि、沈んだ顔を見せるのが嫌で、ルイーズはぱつと勢いをつけて立ち上がった。

「殿下は、明日いつ頃いらっしゃるのかしら？」

「早朝に城を出る予定でいらっしゃいます。正午を回った頃には、到着なさるのではないかと」

「そう。じゃあ、アルク。朝食は私と一緒に食べましょう」

「えっ……？」

そんな、自分のようないち臣下が恐れ多い？と、断ろうとしたアルクの返事も聞かず、ルイーズは軽やかにワンピースの裾をはためかせ、「朝、侍従を迎えによこすわ」と言い残して駆けて行ってしまった。

「……」

呆然と見送るアルクに近寄ってきたロシナnteは、そんな彼の服の袖に鼻面を擦り付けた。

濡れた鼻面を拭くタオル代わりに使われたわけではなく、どうやらロシナnteなりに親愛を表現したかったようだ。

ふんつ、と鼻息を吹きかけて、戸惑う少年の亜麻色の前髪を揺らす。

最後に、まだびちゃびちゃに湿った口を、「ぶっちゅっ！」とアルクの頬へと押し当た。

そうして、びくんと仰け反り怯んだ彼を残すと、ロシナンはルイズの後を追うように、ぽくぽく庭の奥へと歩いて行ってしまった。

そのすぐ後に噴水の前を通りかかったのは、昼間門番をしていたホルン爺さんだった。

彼は、あちこちぐつしより湿った様子のアルクを見つけると、

「おお、おお。騎士殿は、ほんに水が大好きじゃのぉ」

と、朗らかに笑った。

贈り物

「あら……ロシナンテがいないわね？」

翌朝、ベッドを抜けたルイーズは窓辺に近付き、朝日の透けるカーテンを開いて瞳をぱちくりさせた。

常ならば、いの一に彼女に朝の挨拶をするのは、相棒ロシナンテである。

しかし、この日はいつもの定位置にその姿はなかった。

ロシナンテは、今年六歳になるごくごく普通のロバである。

父親は、門番ホルン爺さん所有、リュセツト随一の荷物引きと名高い、ロバとは思えぬ巨体の豪傑。

母親は、皇太子妃の実家であるロツシュ家所有、蝶よ花よと愛玩用に育てられた、それはそれはたおやかな別嬪さん。

彼らが結ばれロシナンテが生まれるまでは、壮大なロマンスがあったのだが、それはまた別の話。

ついでに、ルイーズは彼の両親のことはもちろんよく知っているのだが、その出生に関しては実は甚大な誤解を抱えている。

しかし、それは彼女のせいではないのは、後々判明することになる。

とうのロシナンテはというと、今朝はアルクにくつついていた。

朝日に照らされる城門の袂で、仕事始めの一服をしようと、懷から愛用のパイプを取り出したのは、遅番と交代したばかりの門番ホルン爺さんだ。

彼は森の方から歩いてくる人影を見付けると、「おや、まあ」と眉を上げた。

「騎士殿、おはようさん。ロシナンテを連れて、早朝水泳かい？」

「……おはようございます」

ホルンが驚くのも無理はない。

昨日隣国からやってきた年若い騎士は、ホルンに出会う時は毎回必ず濡れなのだ。

今朝は、服を着たままは浴びはしなかったようだったが、亜麻色の髪からは水がしたたっていた。

しかも、マントは見事に水浸しで、よくよく見ればそれを入れ物代わりに水を張って抱えている。

一体何ごとかいと、まだ火を入れていないパイプをくわえたままそれを覗き込んだホルンは、次の瞬間相好を崩した。

ルーズは、比較的ラフなワンピースドレスで朝食の席に着いた。隣国ヴァルキュリアからの客人が到着するのは、早くても午後を回るだろう。

その前には、リュセツト公国の公女に恥じぬ装いに着替えねばならないだろうが、今はまだいつもどおりのルルでいたかった。

それに、今朝は新しい友達と食卓を囲む約束をしている。

友達と思っているのは、ルーズの方だけかもしれないが……。

自分の支度と食卓が整うと、昨夜の約束通り、ルーズは侍従に頼んでアルクを呼びに行ってもらった。

そうして、間もなくやってきた彼が抱えていたものに、ルーズは瞳を輝かせた。

「おはようございます、殿下」

「おはよう、アルク——それは？」

きちんと身なりを整えてやってきたアルクの手には、大きな陶器の鉢が抱えられていた。

白の地に青い色で美しい紋様を焼き込んだそれには水が張られていて、中には大きな緑の葉と白い花卉がまあるく円を描いている。

「これ……睡蓮？ どうして……」

「昨日、睡蓮をご覧になっていた殿下を、私が邪魔をしてしまいました。こちらの城のものはまだ咲きそうにありませんでしたし、せ

めて一輪でも殿下のお側にと……」

「湖の睡蓮を、持って来てくれたの？」

「はい……ですが、何も考えずに持つてくるなど無粋だったと、後から気づきました……」

アルクのマントの中に睡蓮の花を見つけて、門番のホルンは「騎士殿、引っこ抜いて来なさったのかい？」と苦笑した。

そういう豪快なところは男の子らしいと、一頻り笑った門番の爺さんは、側を通りかかった侍女を呼び止め、睡蓮を入れるための鉢の手配を頼んでくれた。

さらにはその時、門をくぐってやってきた麦わら帽子の男が、鉢植えの指導を買って出た。

用意された陶器の鉢に、底に土を積んでから水を張り、その中にそつと引っこ抜いてきた睡蓮を差し込んだ。

その間にも、城で働くいろんな人々が通りかかったが、慣れない植物の手入れに奮闘する少年騎士を、皆微笑ましげに見守った。

誰一人として、その睡蓮をどうするつもりなのかと、彼に尋ねなかった。

彼らは、自分達の公女がその花を毎年楽しみにしているのを知っていた。

アルクの側に公女の相棒ロシナンテがくっ付いているのを見て、その鉢が彼女のためのものだと思つたようだった。

そうして、完成した睡蓮の鉢を持つてアルクが招待された朝食の席は、なんと公女ルイズの私室だった。

戸惑いながらも侍従に案内されてやってきて、ルイズに迎え入れられた彼は、鉢を日の当たる窓辺に置いた。

彼女に、そこに置いてくれと頼まれたからだ。鉢は、少女が持ち上げるには、少し重い。

ルイズは、しばしの間黙つてその睡蓮の花を見つめていたが、おもむろに顔を上げてアルクを見た。

「アルク、とっても綺麗。本当に、もらつてもいいの？」

「はい、もちろん」

大国ヴァルキュリア随一の公爵家の一員として、それなりに貴族としての教育も受けてきたアルクだったが、幼い頃から騎士の鍛錬にばかり重きを置いてきたので、いささか華やかな事柄には疎い自覚があつた。

女性に贈り物をしたこともなければ、花を愛でたこともない。

姉達には常々エリヴェールの朴念仁と嘆かれて、けれどそんなことを気にも止めずに今までできた。

昨夜、噴水に佇んでいたルーズ公女にあい、花開かぬ睡蓮を見つめる寂しげなその姿に、アルクは彼女に美しく咲く睡蓮を届けたとふと思つた。

ルーズを見送り、一度与えられた客室に戻ってベッドに横になったものの、その眠りは浅かつた。

まだ日も上らぬ内に目覚めたアルクは、軽く身支度を整えて、気が付けばまた昨夜の噴水の前に来てしまつていた。

当然ながら、そこにある睡蓮はいまだ蕾の気配すらなく、わだかまる自分の思いにアルクはひどく戸惑つた。

しかし、逡巡する彼を動かしたのは、何を隠そう公女の愛口バ、ロシナnteだつた。

再びアルクの前に現れたロシナnteは、昨夜ルーズの元に案内した時と同じように先導し、彼を森の湖の元まで連れていつてくれたのだつた。

「ありがとう、アルク」

「いえ……」

思い掛けないアルクからの贈り物に、ルーズはたいそう喜んだようで、無邪気に向けられる感謝と笑顔に、彼もほつとした。

しかし、次に続いた公女の言葉に、アルクはまた少しだけ困ることになる。

「私、男の人にお花貰うの、初めて。嬉しい」

「え……」

アルクにそんなつもりはまったくなかったが、彼は主君を差し置き、彼女に初めて花を贈った男になってしまったのだった。

ルイズは、少々お転婆なところもあるが、いつもかましいわけではない。

アルクは、口のたつ兄と姉に囲まれた賑やかなエリヴェール家では珍しく、寡黙な性格であった。

だから、二人の会食はそれほど盛り上がったわけではないが、とても和やかでゆったりとした時間を、それぞれ楽しんだようだった。給仕役として寄り添った侍女頭と、アルクの世話役としてついていた侍従は、そんな年若い公女と騎士の姿を、にっこりと笑顔を交わして見守った。

朝食が済むと、いよいよヴァルクュリア王太子を迎える準備で、それぞれが忙しくなった。

アルクは、乾かしてもらっていた自分のブーツを履き、厩舎から愛馬クシカを連れて出し跨がると、門番ホルン爺さんに会釈をして城を出た。

国境近くまで、主たるノエル・エディーラ・ヴァルクュリアの一行を出迎えに行くためだ。

ルイズは、兄嫁である皇太子妃ユミルの私室で、ドレスの最終調整を受けていた。

しかし、従姉でもあるユミルは、朝から非常に不機嫌だった。

それは、昨日の衣装合わせの際にルイズが逃げ出したからではなく、その後アルクが持ってきたヴァルクュリア王太子からの贈り物が原因だった。

「まったく、女の支度をなんと思いののかしら。前日ぎりぎりに衣装を押し付けて、これを来て会えだなんて、一体何様のつもりでしょう」

使者として託されたアルクも知らなかった、ノエルからルイズへの個人的な贈り物の中身。

それは、実はドレス一式が入った箱だったのだ。

箱の中にはとても丁寧な文字で、『公女殿下にお会い出来るのが今からとても楽しみです』との手紙が添えられていた。

暗に、顔合わせの際にはこの衣装を着せよ？と、言ってきたようなものだ。

それこそ、何週間も前からドレスを手配して、可愛い義妹を最高のレディに仕立て上げようとしていた皇太子妃ユミルは、突然の横やりにたいそう立腹していた。

これで、贈られてきたのがくだらない品であつたなら、ユミルはたとえ王太子の望みでもはね除けてやろうと思っていた。

だが、綺麗な白い箱に収められていた衣装は、見るからにどれも一級品であり、細かい装飾に至っても妥協や手抜きを感じさせない逸品だった。

白をベースカラーに、ルイズの淡い水色の瞳と同色のグラデーシヨンが施され、所々には愛らしい花飾り。リボンや裾のレースは繊細で、優秀な職人の作品だろう。

悔しいが、ヴァルクリア王太子の寄越したドレスは、ルイズにとってもよく似合っていた。

ユミルはぷりぷりしながらも、可憐に変身した義妹を鏡の前に座らせ、丁寧に髪を梳つてやる。

本来ならそれは侍女の仕事であるが、ルイズを幼い頃から実の妹のように可愛がってきたユミルは、今日の彼女の支度を誰にも譲りたくなかった。

もしかしたら今日、その大切な妹との別れが待っているかもしれない。

そう思うと辛く、悲しく――また、そんな身の上に文句一つ言わないルイズの小さな胸の内を思うと、哀れでならなかった。

今回のルイズとヴァルクリア王太子との縁談には、ユミルにとっても腑に落ちない点が多々ある。

当然、同じことを感じているはずのリュセット公と皇太子クリス

だが、彼らは何か思うところがあるのか、不自然な沈黙を守っている。

それがこの先、吉と出るのか凶と出るのかはユミルには分からないが、ただただこのあどけない義妹が少しでも幸せになることを願ってやまない。

「ルル、とつても素敵よ」

「姉様……」

「あなたは、誰よりも可憐なりユセツトのお姫様。鏡の中の自分をご覧なさい」

「……」

ルーズをこれ以上不安にさせないためにも、自分が沈んだ顔をしているわけにはいかない。

ユミルは精一杯の笑顔を作ると、ルーズの肩を後ろから両手で包み込み、前を向かせた。

鏡の中に映るのは、どんな大国に出してもひけをとらないと胸を張って言える、可憐な可憐な少女。

家族に愛され民に愛される、リュセツトのたった一人の公女。

「自信を持ちなさい、ルル。——誰もが、あなたを愛するわ」

ヴァルキュリア王子が到着したのは、予定通り、正午を少し回った頃だった。

ノエル

到着したヴァルキュリアの一行は客室に通され、そのまま謁見の間ではなく応接室にて、リュセット公アドバーグ三世と会談しているらしい。

ルイーズは、私室で待機させられていた。

彼女が物憂げに覗き込んでいるのは、今朝アルクにプレゼントされた睡蓮の鉢だ。

窓辺に置いたそれを、室内からはルイーズが、窓の外からはぬつと顔を入れてロシナnteが眺めていた。

ルイーズには、もうそれ相応の覚悟ができていた。

今日この後、すぐにヴァルキュリアに行けと言われれば、はいと答える心づもりはできていた。

ただ、どうしたらいいのかわからないことが、一つだけある。

それは、愛ロバ・ロシナnteのことだった。

赤子の頃から育て、ずっとともに過ごした彼とも、別れなければならぬのだらうか。

あるいは、彼も連れて行きたいと、我が俣を言ってもいいのだらうか。

それとなく相談した義姉は、「そんな望みくらい叶えられないようでしたら、ヴァルキュリアの次代は甲斐性なしだと、言いふらしてやりますわっ」と言っていたが、はたしてどうだらう。

「アルクに、お願いしたらだめかな……？」

ルイーズは擦り寄ってきたロシナnteの鼻面を撫でながら、そうぼつりと零した。

しかし、自分の我が俣が、あの優しい騎士を困らせることになってもいけないと思い直し、深くため息を吐いた。

その時――

ルイーズの私室の扉がノックされた。

「いよいよ、自分呼びに父の使いがやってきたのだと思い、彼女はロシナントに「またね」と声をかけて窓を閉め、応接室に向かうつもりで扉の方へ歩き始めた。

しかし、侍女頭が開いた扉の向こうにいたのは、ルイーズを呼びにきた侍従ではなく、父公本人であった。

「父様？」

「部屋に入っても構わないね、ルイーズ」

「あ……はい」

驚きながらも頷いたルイーズの視線の先で、父公はゆつくりと扉を潜り、そうして後ろに続くと思われた兄が、一步身を引いて誰かに先を譲った。

そうして、優雅な足取りでリュセット公主に続いて部屋に足を踏み入れたのは、背の高い男だった。

艶やかなブロンドの髪と、深い翠の瞳。

その物腰は一見穏やかそうだが隙がなく、それまで面識がなかったルイーズにも、彼が件のヴァルクリア王太子ノエル・エディラ・ヴァルクリアだと、一目で分かった。

彼の後ろにはもう一人、王太子と同じ年頃の青年が続き、その背後にはアルクの姿がちらりと見えて、ルイーズは少しだけ肩の力を抜いた。

しかし、傍らに來た父公にそつと名を呼ばれ、ルイーズは慌てて客人に挨拶をせねばと、目の前までやってきていた王太子ノエルを見上げた。

「……」

彼はじつと、表情のない顔でルイーズを見下ろしていた。

冷たくさえ見える美貌は、どこか近寄りがたい。

年が離れているのは承知の上だったが、彼の洗練された大人の雰囲気は幼いルイーズを圧倒し、口を噤ませた。

ロシナントを連れていっていいかなんて聞くと、これだから子供

は……と、鼻で笑われそうな気さえした。

やっぱり無理だ？？ 政略結婚でも、いつか愛し愛されたいなんて、夢のまた夢のように思えた。

ルイズは、ひとり絶望を感じながらも、リュセットの公女として己を奮い立たせ、ドレスを摘んで淑女の礼をしてみせた。

「はじめまして、ノエル殿下。お会いできて光栄です」

「……」

それに、返る言葉はなかった。

最低限の挨拶として、ノエルが「こちらこそ」と返すのが礼儀だろう。

訝しんだルイズが相手の顔を見上げると、片時も視線を離さず彼女を凝視していたらしい瞳が、突然うるつと潤み始めた。

——そして

「会いたかったよ、ルイズ！ すっかり大きくなって……っ！」
みるみると相好を崩してそう叫んだ王子は、がばちよと覆いかぶさるようにして、ルイズを抱きしめたのだった。

ルイズは、パニックに陥った。

婚約の話が出ている相手とはいえ、ノエルは今日初めて会ったばかりの男だ。

それなのに、彼は固まるルイズを軽々と抱き上げると、猫の子を愛でるようにすりすり頬を擦り寄せた。

「ああ、ルイズ！ 私のルイズ！！ ——ああもう、なんて可愛らしいんだろう！！」

「……」

どうしていいか分からないルイズは、助けを求めて辺りを見回した。

最初に目が合ったアルクは、驚愕に目を見開いて固まっていた。

次に目があつたのは、王子に続いた側近らしき男だが、彼は苦笑を浮かべてただ見守っている。

後ろを振り返ると、父と兄が並んでいたが、彼らには特に驚いた様子もなく、それどころか呆れた風にため息を吐いていた。

扉の脇に控える侍女頭も、いつもの穏やかな表情のままだ。

(……どうしよう)

そんな中、ひとり困惑するルイーズを見兼ねてやっと助け舟を出してくれたのは、兄であるリュセツト皇太子クリスだった。

「失礼ですが、ノエル殿下。ルイーズは、まだ貴方のことを何も知らないですよ」

「……なっ！　なんですって！？　それでは——私は……」

「初対面の娘に頼擦りしてくる最高に怪しい男——と、ルイーズには認識されたでしょうね」

「そんなっ……」

ルイーズは何故か愕然とした様子のノエルに戸惑い、近付いてきた兄クリスに縋るように、彼を呼んだ。

「兄さま……」

しかし、ルイーズを受け取ろうと手を伸ばしたクリスを避けるように、ノエルはさらに深く彼女を抱え込むと、上ずった声で叫んだ。
「ひどいじゃないですか！　公も、クリス殿下もっ！　どうしてちゃんと教えておいて下らないのです？」

「それは、そちらが手の内をすべて明かさないからだよ、ノエル君」
次に答えたのは、兄ではなく父アドバーク三世の方だった。

いつも穏やかな父公らしからぬ厳しい顔に、ルイーズの戸惑いは増すばかりだ。

「一方的な要求を突き付けてきて、詳しいことは直接会うまで話せないなどと。これは、本当にヴァルクユリア国王陛下のご意志なのかい？」

「もちろん、父の許可をいただいての行動ですが、この件に関してはずべて私に委ねられております」

「では、ちゃんと納得いくように、我々にも事情を聞かせてくれたまえ。そうでなくば、ルイーズを渡すわけにはいかない」

「分かりました。ですが、その前に……」

ノエルはそこで一度言葉を切ると、自分と父公との会話が理解できず、ひどく戸惑って不安げな表情を浮かべていたルイーズに向き直った。

そして、急に泣きそうな顔をしたかと思うと、再び彼女をぎゅううつと抱きしめて叫んだ。

「ああ、ルイーズ、可愛い姫！ 初めまして、私が本当のお兄様だよ！」

妹と兄達

——私が本当のお兄様だよ！

「……え……？」

ヴァルクュリア王子ノエル・エディーラ・ヴァルクュリアは、確かにそう叫んだ。

当然、ルイーズはわけがわからない。

ノエルは、隣国の次代の国王であり、ルイーズを第三夫人によこせと要求してきた人物だ。

そんな彼が——本当の、兄？

どう反応していいのか分からなくて、途方に暮れたルイーズはノエルに抱き締められたまま首を巡らした。

「父様……」

すぐ側まで来ていた父に向かって、手を伸ばす。

リュセツト公は普段は温和な顔に、今は少しでも痛ましさを浮かべてルイーズを見ていた。

そんな父の姿に、ルイーズの心には不安が大きく広がっていく。

続いて、縋るように兄クリスに視線を向けると、彼は俯いて床を睨みつけていた。

「兄様……？」

クリスとルイーズは、腹違いの兄妹である。

それは、ルイーズも元から知っている事実だった。

ルイーズの母の名を、ルメリア・ディア・リュセツトという。

彼女は、リュセツト公アドバーク三世の後妻として城に嫁ぎ、十九歳でルイーズを生んだ。

その当時八歳だったクリスは、穏やかな継母を姉のように慕い、

妹の誕生をそれはそれは喜んだものだ。

クリスの生母は、とうの昔に亡くなっていて、ずっと寂しい思いをしていたのだから。

母ルメリアは元々病弱で、今から十年前に病で儂くなってしまったが、リュセツト公家は今も昔も深い家族愛に満たされた、温かい家庭であつた。

しかし——ルイーズは知っている。

母が、リュセツト公に嫁ぐ前の経歴。

ルメリアは十六の歳で、隣国ヴァルキュリアの国王フランル・エディータ・ヴァルキュリア——王太子ノエルの父親に、第三夫人として嫁いでいたのだ。

しかし、類稀なる美貌ながらも大人しい性格だったルメリアは、後宮の中で辛い思いをして精神的に疲弊し、見兼ねたヴァルキュリア国王が彼女を解放した。二年余りで離縁というのは、非常に異例なことだ。

そうして、祖国に戻されたルメリアは、公家に手厚く保護され、間もなくリュセツト公と再婚することになったのだった。

「父様……っ！　とうさま、とうさま、助けてっ……！！」

ノエルが言うように、彼がルイーズの本当の兄だと言つのならば、父は——

どつと押し寄せた不安と恐怖に、ルイーズの頭の中は真っ白になり、悲痛な声で父公に向かって助けを求めた。

「ルイーズっ……！！」

もちろん、リュセツト公は娘を取り戻そうと手を伸ばすが、がちり抱え込んだノエルが放さない。

「ノエル君、ルイーズを放しなさい。何も知らない娘を、これ以上混乱させないでくれ！」

「いやですっ！　やっと会えたのにっ……　やっとこうして触れられたのにっ……！！」

リュセツト公とヴァルキュリア王太子によるルイーズの取り合い

で、その場は一時騒然となった。

皇太子クリスは二人を止めるどころか、父に加勢しようとする有様だし、王太子の護衛騎士であるアルクはあまりの展開に戸惑うばかり。

そこで動いたのが、ずっと王太子の背後で笑みを浮かべて控えていた、彼の側近だった。

アルクに似た亜麻色の髪 of 青年は、にこにこしたまま主の真後ろまで近付くと、おもむろに拳を振り上げ

——ゴチンッ！

ノエルのブロンドに包まれた脳天に、容赦なくそれを振り下ろした。

「——った……！」

ちかちかと目の前に星が飛んだノエルは、思わずルイーズを抱く腕が緩み、その隙を見逃さなかったリユセット公に彼女を奪い返されてしまった。

そうして、頭を抑えてその場に踞った王太子に構わず、その側近の男は目を丸くしたルイーズ達に向かって言った。

「いやあ、どーもすみません。こんな、ケダモノのような殿下で。普段は人畜無害なんですがねえ」

「……」

返答に困ったルイーズが、彼らの後ろに佇むアルクに目を向ける。すると、彼は今度はほっとしたような顔をしていた。

ヴァルキュリア王太子の側近の、主を主とも思わぬ手荒い扱いが、かの国にとっては珍しくもないことなのだと、ルイーズはアルクのその態度で理解したのだった。

床で悶えるノエルを尻目に、側近の男は上品な仕草でルイーズの手を取り、柔らかな笑みを浮かべて自己紹介をした。

「初めまして、ルイーズ公女殿下。噂に違わぬ可憐さに、我を忘れ

てしまった主人の気持ちも分からないではないですね」

「あなたは？」

「オルファ・シヴ・エリヴェールと申します、姫。ノエル殿下の一番近い場所に、これまでもこれからもお仕えする者です。どうぞ、お見知りおきください」

「エリヴェール？」

オルフェと名乗った王太子の側近は、亜麻色の髪と若葉色の瞳の、優しい紳士だった。

彼の家名とその容姿にぴんときたルイーズは、扉近くで控えるアルクに再び視線をやった。

それに気づいたオルフェは、にこりと笑みを深めて彼を側に呼び寄せた。

「私は、エリヴェール公爵家の長男。アルクは弟です。昨日は、彼がこちらでたいへんよくしていただいたそうで……」

オルフェは隣に並んだ弟の肩を抱くと、リュセツト公や皇太子クリスに向かって礼を述べた。

アルクは兄の傍らで、少しだけ居心地が悪そうにしている。

「アルクの、お兄様……？」

そんな彼らを見比べて、ルイーズがぽつりとそう漏らす。

すると、それまで穏やかな雰囲気を纏っていたオルフェが一変し、ぐわしつと彼女の両手を掴んだかと思うと、「——いいっ！！」と叫んだ。

「姫っ、今の“お兄様”っていうの、もう一回お願いします！——うちにも二人妹がいるんですがねえ、そんなに可愛く呼んではくれないですよ。ねっ、ねっ、姫。もういいかい！」

「——オルフェっ！ そのいやらしい手を離せ！ ルイーズは私の妹だぞ。図々しいにもほどがあるっ！」

「ルイーズは私の妹ですっ！！」

とたん、それまで足元で頭を抱えていたノエルががばりと立ち上がり、側近からルイーズの両手を奪い取って叫んだかと思うと、さ

らにクリスが参戦してその手を引き剥がした。

「……」

ぎゃあぎゃあと、いい歳をした大人の男が三人団子になって、やかましいいつたらない。

どさくさに紛れて彼らから逃れたルーズは、呆れたようにため息を吐く父公にしがみついた。

揉めている男達の向こうに、啞然とした様子のアルクを見つけた。彼はルーズと目が合った瞬間、実に申し訳なさそうな顔で会釈した。

ルーズは混乱しながらも、アルクを見ていると何故かほっとする自分に気づいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1967w/>

幸福を告げる声

2011年10月4日11時59分発行